

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02292

研究課題名(和文) 徳川将軍家の御物形成と御用絵師の役割に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Official Role of Goyo-Eshi in building of the Tokugawa Shogunate Collection

研究代表者

小野 真由美 (ONO, Mayumi)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・主任研究員

研究者番号：90356270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：御物とは王権を象徴するもののひとつである。徳川幕府の御物「柳営御物」は、明暦の大火(1657年)で罹災し、そのほとんどが焼失してしまうが、諸大名からの献上品によって再構築されていった。その背景には、主君と家臣の主従関係における献上と下賜という贈与システムがあった。幕府の贈与においては、名物・名品を権威付ける鑑定が重視された。その鑑定を担ったのが御用絵師・狩野家であった。本研究では、大火後に新たに築かれていった御物の様相を、「柳営御物集」諸本や幕府関連史料によって確認し、狩野家の鑑定控え「探幽縮図」「常信縮図」を読み解くことで、御用絵師がなった文化的役割を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明暦の大火(1657年)で焼失した柳営御物が、大名の献上品によって再構築されたことを究明し、とくに節目となる『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』制作(1691年)の際に、狩野家および古筆家が公儀の鑑定を行ったことの意義を明らかとした。また狩野家の鑑定控え「探幽縮図」等を読み解くことで、江戸時代における名物名画に関する重要な資料を提示した。

研究成果の概要(英文)：Treasures are one of the symbols of kingship. The Ryuei Gomotsu (Tokugawa Shogunate Collection) is a treasure collection of the Tokugawa Shogunate that was nearly completely incinerated in the Meirkei no Taika (Great fire of Meireki) in 1657, but this collection was rebuilt by gifts from the various feudal lords. The background behind this was the gift-giving system called "Offerings and Gifts" under the master and servant relationship between the lord and his vassals. For Shogunate gift-giving, it was important for famous treasures to be authorized by an appraisal. This appraisal was conducted by the Goyo-Eshi of the Kano Family. This research investigated the aspects of the treasure that was rebuilt after the Great Fire by checking the various texts of the Ryuei Gomotsu and shogunate related historical materials and also considered the cultural role of the Goyo-Eshi by deciphering the Tan'yu Shukuzo and Tsunenobu Shukuzo, which are the appraisal copies of the Kano Family.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術 江戸絵画 狩野派 土佐派 御用絵師 柳営御物 探幽縮図 常信縮図

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

わが国では、由緒ある優れた文物を「名物」とし、その伝来や格付けを記した名物記などが編まれてきた。なかでも朝廷の有する禁裏御物と、将軍家の有する公方御物は、王権を象徴するものとみなされている。慶長8年(1603)に、徳川家康が征夷大将軍に任ぜられて以降、徳川家が新たな御物を形成することとなる。しかしこの江戸幕府の御物、すなわち柳営御物は、明暦3年(1657)の大火に見舞われる。大火以前については、「御数寄道具帳」(東京大学図書館)、「明暦大火焼失茶道具目録」(篠山市教育委員会)などの史料から、その内容をうかがい知ることができるが、大火以降については曖昧で漠然としていた。なぜなら「玩貨名物記」などの懐古的な名物記が流通し、失われた名物があたかも存在していたかのようにとらえられてきたからである。

本研究の代表者は、江戸時代における名物名画の受容、とくに大名の所持する名画について、狩野探幽(1602~1674)の鑑定控え「探幽縮図」をとおして考察してきた(小野真由美、2005年・2006年)。そのなかで、明暦の大火以降の柳営御物の再構築に着目するにいたった。ついては、柳営御物の目録のなかでも元禄4年(1691)の『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』(東京文化財研究所)において御絵師・狩野家と古筆見・古筆家が鑑定を行っていることに焦点をあてた。名物の権威付けは御物形成においてきわめて重要であり、それをになった御用絵師による鑑定の意義は小さくない。よって、大火後の徳川家コレクション形成における御用絵師の役割を考察することとした。

2. 研究の目的

(1) 徳川将軍家の御物の目録である「柳営御物集」諸本を精読することで、御物形成の様相と変遷をたどり、大火後の柳営御物の輪郭を明確にする。

(2) 鑑定控え「探幽縮図」「常信縮図」を判読し、鑑定者としての御用絵師の役割を確認する。

(3) 柳営御物が再構築される背景にあった「献上と下賜」という贈与文化について、その根幹となる互酬性を担保した鑑定による権威付けについて、その実状を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 「柳営御物集」諸本の調査を行う。まず明暦の大火以前の柳営御物について「御数寄道具之帳」(東京大学図書館)、「明暦大火焼失茶道具目録」(篠山市教育委員会)を調査し、つぎに大火後の柳営御物について『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』(東京文化財研究所)、「諸家遺物得物献上記」(国立公文書館)を調査する。

(2) 「探幽縮図」「常信縮図」の注記を可能な限り判読し、御用絵師による鑑定の事例と現存事例を比較し、歴史的人物との関連などを調査する。

(3) 徳川幕府関係資料から将軍と家臣による献上と下賜に関する記述を抄出し、明暦の大火前と以後の変化などを考察する。

(4) 御用絵師の社会的地位に加味された鑑定者としての役割を明らかにするため、同時期に活躍した土佐派や住吉派の動向を諸資料にあたって調査する。

4. 研究成果

(1) 柳営御物のすがた

「柳営御物集」諸本に記載される名物の情報をテキストデータ化し、重複するものや新規の物などを時系列で整理したことで、柳営御物が想定以上に流動的な御物であったことが明確になった。とくに書画については、大火でほぼすべてが失われたことがわかり、徳川家コレクションの再構築においては、狩野家と古筆家による鑑定作業が、御物の権威付けに不可欠であったことがみえてきた。こうした柳営御物の実体については、東京文化財研究所のオープンレクチャーにて講演を行った(小野「描かれた枇杷図 狩野探幽と江戸の再生」2018年)。また柳営御物のテキストデータは、国立情報学研究所 researchmap のマイポータルで公開した。

(2) 絵師と幕臣の交友

「探幽縮図」には、大名をはじめ幕臣の名が頻出する。そうした人物の経歴を『寛政重修諸家譜』を参照して一覧とした。また、探幽と永井尚政(1587~1668)との交友に焦点をあてて考察した。大名茶人として知られた尚政(信斎)は、名物の目利きでもあったことがわかった。探幽と尚政の交友は茶の湯のみならず、草花の贈答にもおよんだ。そして両者が明暦の大火後、名物の鑑定や収集にかかわっていたことを明らかにした。両者の交流については東京国立博物館研究誌『MUSEUM』に発表した(小野、2018年)。さらに、『徳川実紀』にみられる元禄年間までの献上と下賜の記事を抄出し、テキストデータ化して国立情報学研究所の researchmap のマイポータルに公開した。

(3) 狩野家による古画の収集と鑑定

狩野探幽の鑑定控え「探幽縮図」「常信縮図」を判読した。なかでも東京国立博物館所蔵「梅竹菓子図巻」の170図については翻刻を終えることができた。以上によって江戸時代における鑑定の事例が参照可能となった。たとえば、つぎのような例があげられる。

本荘藩2代藩主の六郷政勝(1609~77)の所持する墨竹図は、「寛文八 三月廿二日六郷いか殿より来 東破正筆と申遣候」と鑑定されており、現存する探幽筆『臨画帖』に、その模写が収められていることがわかった。

米沢藩4代藩主の上杉綱憲(1663~1704)の所持する墨梅図は、「寛文八 八月十三日 上杉喜平次殿より来(中略)馬遠と書付有て候 見事」と鑑定されており、これも現存する探幽筆『臨画帖』に、その模写が収められていることがわかった。

松本藩2代藩主の水野忠職(1613~1668)の所持する果実図は、「水野山羽殿かけ物 景昇ト外題遣」と鑑定されており、韓旭という現存作例のきわめて少ない画家を知る貴重な手がかりとなるものとわかった。

以上は、ごく一例にすぎないが、は、柳営御物の徹宗筆猫図と関連しており、この縮図の読解から、御用絵師の鑑定が將軍の謁見や藩政の代替りにおいて重視されたことが推測され、大名による名物の献上が幕府の主従関係において重要であったことが示唆された。



墨竹図(「梅竹菓子図巻」東京国立博物館)



墨梅図(同)



菓子図(同)

(4) 大火後の柳営御物

「柳営御物集」諸本のなかでも『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』は、大火を経た柳営御物の内容を確認しうる貴重な資料であることを確認した。また、『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』は当時の書画についての価値基準や鑑定内容を明記した数少ない資料のひとつといえる。本資料には、道具類の記載がなく、書画のみが抄出されており、書画の鑑定が制度上確立していたことを示唆する。すなわち、元禄年間までに、古筆家と狩野家が制度上の地位を保証されていたことと関連することがわかった。本資料の翻刻と解題については、東京文化財研究所研究誌『美術研究』に発表した(小野・恵美、2018年)。

(5) 元禄期における御用絵師制度

御用絵師の鑑定者としての地位が元禄期に制度上確立したことを、当時の文化的状況のなかでどのようにとらえるべきかを考察し、同時期に活躍した土佐派や住吉派の動向を諸史料にあたって調査した。とくに土佐派の画法書『本朝画法大伝』を調査し、その成立の意義や意図を狩野派の状況に照らして考察した。これにより、狩野家は有識者(コノワスール)としての地位を確立し、いっばうで御用については住吉家が將軍の愛顧をうけて台頭し、土佐家は自家の秘伝を書物として明文化し、流派の存続をはかったことがみえてきた。これについては美術史学会例会にて発表を行った(小野、2019年)。

〔参考文献等〕

- ・小野真由美「新収品紹介 探幽縮図 狩野探幽筆」『MUSEUM』598・601、2005・2006年
- ・小野真由美・恵美千鶴子「研究資料 『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』の翻刻と解題」『美術研究』425、2018年
- ・小野真由美「至高の気品 土佐光起撰『本朝画法大伝』の意義、そして意図するもの」美術史学会東支部例会、2019年

国立情報学研究所 researchmap マイポータル (<https://researchmap.jp/onomayumi>)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野真由美・恵美千鶴子	4. 巻 425
2. 論文標題 研究資料『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』の翻刻と解題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野真由美	4. 巻 672
2. 論文標題 《研究ノート》狩野探幽と永井信斎尚政 御用絵師と大名茶人の交友	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 MUSEUM	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 恵美千鶴子	4. 巻 73
2. 論文標題 世尊寺家の書 藤原定信筆「戊辰切」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 BIOCITY	6. 最初と最後の頁 110-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野真由美	4. 巻 1450
2. 論文標題 狩野長信筆 山水図	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 國華	6. 最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野真由美	4. 巻 665
2. 論文標題 《研究ノート》三条西公条賛「詠歌之大概歌仙図」（陽明文庫所蔵）について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 MUSEUM	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野真由美
2. 発表標題 土佐光起著『本朝画法大伝』考 「画具製法并染法極秘伝」を端緒として
3. 学会等名 東京文化財研究所文化財情報資料部第3回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野真由美
2. 発表標題 描かれた枇杷図 狩野探幽と江戸の再生
3. 学会等名 第51回オープンレクチャー（東京文化財研究所）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野真由美
2. 発表標題 至高の気品 土佐光起撰『本朝画法大伝』の意義、そして意図するもの
3. 学会等名 美術史学会東支部例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	恵美 千鶴子 (EMI Chiduko) (60566123)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長 (82619)	60566123
連携研究者	横山 梓 (YOKOYAMA Azusa) (00596736)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員 (82619)	